別紙 2

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　岡本佳子

岡本佳子氏が本研究科超域文化科学専攻に提出した博士論文「神秘劇をオペラ座へ――バルトークとバラージュの共同作品としての『青ひげ公の城』」は、近代ハンガリーを代表する作曲家ベーラ・バルトークが残した唯一のオペラ《青ひげ公の城》（1918 年、ブダペシュト王立歌劇場初演）の分析を通して、20 世紀初頭のブダペシュトにおけるモダニズムの展開を、新たな資料渉猟を踏まえながら、独自の視点から描ききった労作である。

岡本氏は、このオペラの台本の原作を書いたベーラ・バラージュと作曲者バルトークの関係を、従来ほとんど顧みられなかったバラージュ側から綿密かつ詳細に追うことによって、そこにジェルジ・ルカーチのような当時のハンガリーの思想家や芸術家たちが必要と感じていたモダニズム演劇のあり方を浮き彫りにし、その視点からバルトークのオペラを見直すという、本国ハンガリーでもほとんど行われていない方法でこの作品にアプローチしている。オペラ《青ひげ公の城》ではなく、バラージュとバルトークの共同作品としての『青ひげ公の城』を対象にするという視点が、岡本氏の研究の主眼である。

そこには、バラージュに関する一次資料や、活動初期のルカーチがハンガリー語で残した資料等の綿密な検討が含まれており、またそこから単にオペラ作品研究に留まらない、ハンガリーのモダニズム運動が当時宿していた問題が領域横断的に露わになってくる。

岡本氏は、そうした背景を踏まえつつ、最後にもう一度オペラ《青ひげ公の城》の分析に立ち返り、ここまでの論の展開で得られた新たな知見をもとにしながらも、さらにバルトークの残した手稿譜の読み解きを交えながら、この作品を新鮮な視点から解釈している。

以下序章と 5 つの章、および終章からなる本論文の内容を順を追って説明する。

論文の主旨と意義が述べられている序章に続き、第 1 章「『国民音楽』の殿堂――ハンガリー・オペラと王立歌劇場」においては、19 世紀前半に創立された王立歌劇場の上演レパートリーを綿密な統計とグラフ化によって示すなかから、国民オペラ創作の代表者フェレンツ・エルケルの圧倒的な人気と、それに対するモダニズム側からの新たな国民オペラへの渇望が描かれている。19 世紀から 20 世紀への世紀転換期において、モダニズム運動が顕著であったブダペシュトという歴史的・文化的コンテクストのなかで、1911 年にバルトークがオペラ《青ひげ公の城》の創作に着手する前提が、多くの資料を手際よく扱いながら示される。

第 2 章「音楽と演劇における『ハンガリー』の在りか――狭間の世代による芸術運動」では、文学、音楽、思想といった幅広い分野で確認されるブダペシュトにおけるモダニズム運動の様子が描かれ、そのただ中にいたバルトークの人的交流と思想形成が明らかにされる。同化ユダヤ文化人であるバラージュやルカーチとの接触のなかで、バルトークが 1900 年前後の愛国主義的な意識からコスモポリタンへと変わっていく様子と、それが 1911 年の《青

ひげ公の城》創作へと導かれていく様子が丹念に描かれる。影響力の大きかったモダニズム雑誌『ニュガト』などの路線とは異なり、より若いモダニストたちのサークルであった実験劇団「ターリア協会」には、ルカーチやバラージュが関わっており、社会との結びつきをより強く意識した新たなモダニズムという思想風土のなかで、バルトークの変化が生じていることを岡本氏は明らかにした。

第３章「バルトークとバラージュによる『青ひげ公の城』の制作」では、第２章までの議論を前提にしながら、バラージュの原作戯曲がどのように成立し、それにバルトークがどのように付曲していったかということが、ふたりの創作史をそれぞれ綿密に追い、さらに両者を比較検討するなかから克明に論じられている。

第４章「バラージュの神秘劇――戯曲としての『青ひげ公の城』」では、ルカーチがハンガリーに求めていた新たな演劇形態としての「1 幕神秘劇」として、バラージュがこの戯曲を完成させたこと、そしてそこにはバルトークがトランシルヴァニアで収集してきた民謡の譜例「セーケイのバラッド」の影響が読み取れることを岡本氏は指摘する。ハンガリー語の韻文詩の独特のリズムを利用しつつも、内容的には、単に人間だけではなく、城のような眼に見えない「登場人物」の役割を重視しながら、人間の複雑な心理を克明に描き込んだ神秘劇の創作というバラージュの意図がここで浮き彫りにされる。しかしながら、この作品が当時のハンガリーでは「ドイツ的」と批判され、その後バラージュの活動拠点がドイツへと移っていく理由も、岡本氏の議論は明らかにした。

第５章「『青ひげ公の城』の音楽による解釈――『夜』への道筋」では、バラージュの戯曲をバルトークがオペラ化するにあたって、必ずしも原作通りのドラマトゥルギーがすべて踏襲されたわけではなく、独自の変更と解釈が加えられたことが指摘される。ことに、バルトークが 3 通りのヴァージョンで残した幕切れを、岡本氏は手稿譜における変更を丹念に読み解いていく過程で、ことに最終ヴァージョンでバルトークが、この作品のテーマのひとつである「夜」の解釈に決定的な変更を加え、そのために青ひげ公の孤独が原作戯曲よりいっそう深められていることを指摘する。バルトークとバラージュは、オペラ創作途中から疎遠になっていくが、共同制作がこうした解釈の一致・不一致を踏まえながら進んだことを岡本氏は続く終章で跡づけている。

審査に際しては、同時代の象徴主義と神秘劇との関係がもう少し詳しく論じられたのではないかという指摘や、ブダペシュトにおける同化ユダヤ人サークルの意義をより大きく捉えるべきなのではないか、人的交流の掘り下げが不足するのではないかといった指摘、また「セーケイのバラッド」をより具体的に説明する必要があったのではないかという指摘などがあったが、単なるオペラ研究に留まらない、より広範なハンガリー・モダニズム文化研究への貢献となる本論文の意義を評価することに関しては、審査委員の意見は一致した。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。